

な

ご

み

つ

う

し

ん

発行日：平成 29 年 9 月 25 日（第 33 号）

発行：島田療育センターはちおうじ

2011 年（平成 23 年）4 月 1 日に、島田療育センターはちおうじは歩みを始めました。それは、東日本大震災の年でした。1 年後、あくりるたわしの活動を手伝えることができ、相馬と私の物語が始まりました。そんな物語を紹介します。

所長 小沢 浩

## あくりるたわし

### （1）産 声

「ささやかやけれど福島の皆様への気持ちを行動に移すためにこんなことを始めました。少しでもご協力をいただければありがたいです。」

板東あけみさんからこのメールが届いたのは、東日本大震災からちょうど 1 年がたったときのことであった。

板東あけみさんは、「ベトナムの子ども達を支援する会」の事務局長でベトナムでの母子手帳作りをはじめ発展途上国の支援をしている私にとって人生の師ともいえる友人である。

添付のファイルには、あくりるたわしの宣伝ポスターがあった。ポスターの欄には

「作っておられる方々の状態や思い」があった。



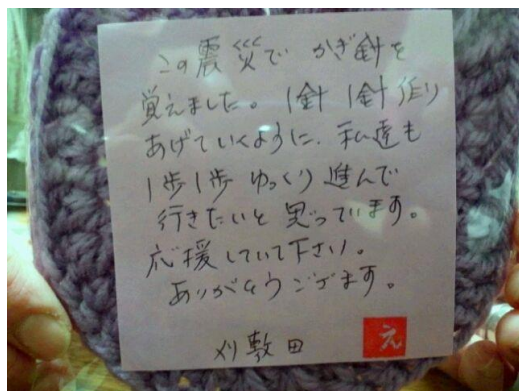
A さん 70 歳代女性、1 人暮らし。震災前は、入港してきた船を迎えて魚の選別などをして 1 日 3000 円から 4000 円の収入で食べていたが、今はそれもできずに、年金だけで非常に苦しい生活。100 円でも良いから収入がほしい。

B さん 70 歳代女性、ご主人と 2 人暮らし。A さん同様に船迎えをしていたが、津波に飲まれて腕を骨折、その後乳がんがわかり手術をした。今も手がうまく動かないのでリハビリと収入のために少しでもやりたい。

Cさん 50歳代女性、年老いた両親や子どもなどと住んでいる。家を新築して、2、3カ月間住んだ時に震災が来て家が破壊された。また高い機械を入れたばかりの個人の持ち船も壊れたので、今は家と船のローンが2つ残っている。夫はがれき撤去の仕事に就いており、ご自分も夜旅館の下働きをしている。昼間のあいた時間に、少しでも編んで収入がほしい。

あくりるたわしの編み手さんはほとんどの人が編み物の経験がなかった。最初は何回も編み方を聞きに来て、1カ月かかってやっと仕上げた。

「この震災で、かぎ針を覚えました。一針一針作り上げていくように、私たちも一歩一歩ゆっくり進んで行きたいと思っています。応援していて下さい。ありがとうございます。」初めてのメッセージカードの言葉である。1つ穴が開いたたわし。お世辞にも上手とはいえなかった。しかしどん底から立ち上がろうとしている編み手さんの姿に、活動を支えている相馬遊樂応援団の小幡広宣さんは涙した。



活動を支えている小幡さんも家を無くした。ほとんどの家が津波で流され土台だけの中、ぼろぼろになりながらぽつんと1軒残った家。



小幡さんはその光景をみて鳥肌が立ち、同時に『自分が立ち上がらなくては…』と感じたという。

あくりるたわしは「バトン」、希望の「バトン」である。

### — 「バトン」を多くの 人につなげる —

その思いで、「相馬あくりるたわしの会」は立ち上がった。

(奇跡がくれた宝物 小沢浩著  
クリエイツかもがわ より)

